

## 養育院と谷中 後編 番町で“目”を瞞(みは)る？

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助&文筆業）



国学者・塙次郎の暗殺については、もう一つ見落とせない事実がある。

それは生前、外国船が頻繁に訪れるようになり、小笠原の領有を確固たるものにするため、幕府は塙保己一が集めてきた過去の文書の中で証拠となるような文書を、保己一のとを継いだ塙次郎に探させていたことである。

暗殺の前年（文久元年）には、大久保一翁も一年ほど外国奉行、小笠原島開拓事務江戸取扱いであったことから、二代にわたる国学者に小笠原のことを調べさせたのは、一翁自身の指示であった可能性が高い。

大久保一翁の盲目の塙保己一への敬意、

そして尊王攘夷派への憤り、いかばかりか。

塙保己一のことをうたった川柳「番町で目あき目くらに道をきき」を思ったことだろう。道は学問を指す。目あきでも「見えていない者が、暗殺を企てる？」

しかも肝心な、その塙次郎を襲った側の人物が、長州藩の伊藤博文と山尾庸三だったのだ。



松下村塾で学び、尊王攘夷運動に参加。薩長政権で力を伸ばす。初代内閣総理大臣伊藤博文

ただ当時は犯人は分からず、なんと六十年後の一九二一年、塙検校百年祭の席上、保己一の顕彰団体の温故学会を代表して渋沢栄一が挨拶した際、その暗殺事件に触れ、突然暗殺者の名前を明らかにし、参列者を驚かせたと言われる（『素顔の塙保己一』塚正一）。

もともと、一翁には犯人名を渋沢栄一は早くから伝えていたはず。

ところが、ここにも歴史の不思議がある。

この山尾庸三と言う人は、文久三年には伊藤博文と一緒に英国に行き、造船所で障害者が働いている姿に強い印象をもち、帰国後、明治四年には（工学頭になっていたが）盲啞教育に関する建白書を政府に出すのであった。



工学を歴任。工  
学部長となる工  
学寮を創立。  
後、東京大学  
の前身となる  
維新の重んじ  
治のちの工学  
明の部の学寮

日本工学の父  
山尾庸三

番町で「見えなかった」道を新しい時代に  
瞠目し開こうとしたのである。

その後、養育院が出来てのち、じつは明治八年には、津田仙や中村正直や古川正雄らによって訓盲院設立願（養育院の盲人室からの独り立ち？）が大久保一翁府知

事に出され、一翁は会議所に審議を委託する。（会議所側の回答では訓盲院を養育院の附属にしようとしたようだ）



東京府知事  
大久保一翁

こうした中で東京日々新聞は中村正直の話載せる。中村は、明治四年の山尾庸三の建白書のことなどを挙げて訓盲院認可を促すコメントを残したのだ。

大久保一翁も府知事として（知人でもある）中村正直のコメントを読んだとすると、あの（暗殺者）「山尾庸三」の建白のことに触れた箇所を読んでなんと思ったことだろう。

盲人のもつ記憶力や収集力（塙保己一）によって小笠原の問題が助けられたのに、その盲人の子ども（塙次郎）を暗殺しておきながら、よくもまあ、盲啞の建白もあつ

たものではない、と一翁は思ったか。いや、それよりも、山尾庸三の苦悩を一翁は読み取ってその先を考えていたか…それは分からないが、この養育院と訓盲院設立こそ、“目”まぐるしい江戸から明治への道しるべであったと私には思えてならない。（次の楠本府知事の時代に認可された訓盲院の母体、楽善会に山尾庸三も明治九年に入会している。）

楽善会訓盲院（築地）

